

「ありのままのわたしを生きる」ために

その後

第2回

「小石になりたい」

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

教員になって4年目のある日、授業を担当しているクラスにいる N という在日の生徒に「上履きに書いてある名前、きみの本名？」と声をかけました。それは、教員になってはじめて在日の生徒に声をかけた瞬間でした。

大学時代、キリスト教の教会の先輩から「教員になるんだったら在日の子とかかわれ」と言われていました。しかし、いざ教員になってみると「かかわるって何？」状態が続いていました。なんの関係もないのにいきなり「きみ、在日やんな」なんていう会話ができるはずありません。かかわらなきゃならないけど、声をかけることすらできない。そんな悶々とした日々が3年続き、4年目ようやく在日の子がいるクラスを担当することができたのです。

その声かけ以来、通名を名のってる N に本名をうながしてみたり、家庭訪問をしてアボジやオモニと話をしたりというつきあいがはじまりました。しかし、そのかわりには、最終的に N から関係を切られてしまうような中途半端なものでした。それ以来、かかわる限りは、その子の一生を面倒みるくらいの覚悟でなきゃならないと思うようになりました。

N が卒業した翌年、今度は R という在日の生徒を担当しました。R と一緒に在日の子が集まる社会科学部というクラブをつくったり、家庭訪問に行って焼肉を食べさせてもらったり、それなりのかかわりをしていたつもりでした。しかし R も担任からはずれた翌年には関係が切れてしまいました。いったい自分の何がダメだったのか、真剣に悩みました。

それでも新しい生徒は入ってきます。R の卒業と入れ替わりに S という在日の生徒が入学して、わたしは担任をすることになりました。S をクラブに誘ったのはいいけど、何をやろうと思いました。ハングルの勉強も歴史の勉強も、大切だけどあまりおもしろくありません。そこで思いついたのがチャンゴでした。チャンゴはひとりではできません。日本人の子も含めていろんな生徒に声をかけて、10 人ほどのクラブになり

ました。当時チャンゴを叩いてる高校生は京都では珍しく、これをきっかけに他校の生徒とのつながりができました。このつながりが、S の卒業後、京都在日外国人生徒交流会の立ち上げへとつながりました。1994 年のことです。

交流会をはじめた当初、「交流会を主催する以上、自分が生徒を連れていかねば」と、必死で在日の生徒を誘っていました。しかし、そんな誘い方をしても生徒が来るわけがありません。生徒が来ないと焦ります。焦って生徒を誘っても来てくれません。悪循環でした。そんなわたしを見て、一緒に交流会をしている教員が「交流会という場をつくってくれてるんやから、ええやん」と言ってくれました。いつしか、「交流会を続けるだけで OK、誘った生徒が来てくれたらラッキー」というスタンスに変わりました。

交流会は思わぬ出会いをもたらします。例えば、T という日本とロシアのダブルの生徒が参加したことがあります。中国帰国生徒の Y の「家の中は中国。ドアを開けたら日本」という話を聞き、T は「そうそうそう、一緒一緒！ 自分も家の中はロシアで、ドアを開けたら、日本」とうれしそうな顔を見せてくれました。

かつて「この子らの面倒、一生みなきゃ」と思っていたわたしは、いつの頃からか「小石になればいいや」と思うようになりました。「面倒、一生みなきゃ」なんていう大きな石は、子どもたちはよけていきます。小石の持ち味はフットワークの軽さです。子どもが歩いている前に、気づかないうちにチョロチョロと出ます。生徒は「わたし」という小石をけとばしてちょっとよろけます。でも、「おっとっと」とバランスをもどした時、ほんの少しだけそれまでとは違う方向へと歩みを進めます。すると、それまでの歩みでは出会えなかった「誰か」と出会います。その誰かとの出会いは、きっと次の出会いへとつながっていきます。

わたしの役目は、子どもたちが自らの力で誰かと出会っていく、その最初のきっかけづくりでいい。そんなことを思いながら、今も交流会を続けています。